モンゴル文字で名前を書く ❶

藤井 麻湖（ふじい まこ）
愛知淑徳大学講師

現在、モンゴル文字は主として中国の内蒙古自治区で用いられている。モンゴル国やその他のモンゴル人の居住する地域では、特別な出版物を除いて通常キリル文字が使われている。

チンギス・ハーンは、ナイマン部を滅ぼしたときに捕らえたウイグル人宰相タタトンガに命じ、モンゴルの諸王にウイグル文字でモンゴル語を書くことを教えさせた。これがモンゴル文字でモンゴル語を書くことの始まりである。この文字は縦書きで、左から右に向かって書かれる。

モンゴル文字は子音と母音を区別する文字なので、日本語のひとつひとつの文字をモンゴル語で書く場合、ヘボン式ローマ字表記のように、子音と母音を組み合わせて表記する。だから、単純に考えると、日本語を表記する場合、基本になる五母音と子音の字形をマスターすればいいということになる。だが、モンゴル文字の場合、ヘボン式ローマ字表記よりも、やや複雑である。というのも、モンゴル文字の母音やいくつかの子音は語の最初、中間、末尾のどこに位置するかによって字体が変化するからである。それぞれの字体を語頭形、語中形、語末形とよんでいる。基本になる五母音の字体を示すと図②になる。「あ」の語末形が二種類あるが、これは直前の文字により書き分けられる。

子音のほうは、一部を除いて語中の位置によって変化しない。日本語では子音だけを発音することはないので、子音と母音を一緒にした「モンゴル文字による五〇音図例」を図①に挙げておく。ただし、紙幅の都合により語頭形のみを記した。また、日本語でもモンゴル語でも「ん」で始まる単語がないので、図①では「ん」の語中形を示しておく。注意が必要なのは、たとえば「かきくけこ」が語頭にきても、モンゴル文字では、子音に接続する母音の形は語頭形ではなく、語中形になることである。

それでは以上を踏まえて、「石田」という姓をモンゴル文字で書いてみよう（図③-1）。最初の母音「い」は語頭形なので、ᠢ。「し」は語中形なので図①にはないが、じつは語中形は語頭形と同じことが多く、この「し」の場合も語頭形と同じく、ᠢとつなげて書く。最後の「だ」は語末形であるから、これは図①の語頭形のᠳではなく、子音dの形ᠳに図②の「あ」の語末形ᠠを接合させたᠳᠠを書く。

同じように、図①と図②をみながら「源義経」を書いてみよう（図③-2）。義経といえば、室町時代ころから各種の伝説がつくられてきたが、なかでも有名なのは義経＝チンギス・ハーン説である。これは小矢部全一郎著『成吉思汗ハ源義経也』（一九二四年）により流布したものと考えられる。歴史家によると、これの元本は、イギリスのケンブリッジ大学に留学していた末松謙澄（一八七九年）という後の逓信大臣・内大臣が、日本人への差別的な待遇に反発し、イギリス人を装い匿名で書いた論文という。ヨーロッパと対峙するためには、義経ではなく、チンギス・ハーンが必要だったというわけである。

モンゴル文字（内蒙古自治区で出版された英雄叙事詩「ジャンガル」の一部から）

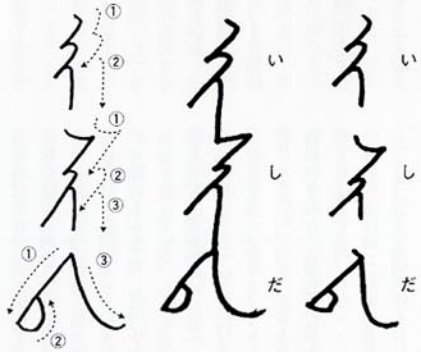
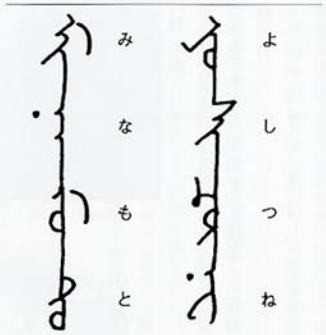
図①　モンゴル文字による50音図例

ぱ行	ば行	だ行	ざ行	が行	わ,を,ん	ら行	や行	ま行	は行	な行	た行	さ行	か行	あ行	
pa	ba	da	za	ga	wa	ra	ya	ma	ha	na	ta	sa	ka	a	ア段
															a
pi	bi		ji	gi		ri		mi	hi	ni	chi	shi	ki	i	イ段
															i
pu	bu		zu	gu	wo	ru	yu	mu	fu	nu	tsu	su	ku	u	ウ段
															u
pe	be	de	ze	ge		re		me	he	ne	te	se	ke	e	エ段
															e
po	bo	do	zo	go	n語中形	ro	yo	mo	ho	no	to	so	ko	o	オ段
															o
びゃ行	びゃ行		じゃ行	ぎゃ行		りゃ行		みゃ行	ひゃ行	にゃ行	ちゃ行	しゃ行	きゃ行		
pia	bia		jia	gia		ria		mia	hia	nia	chia	sia	kia		ア段
															a
piu	biu		jiu	giu		riu		miu	hiu	niu	chiu	siu	kiu		ウ段
															u
pio	bio		jio	gio		rio		mio	hio	nio	chio	sio	kio		オ段
															o

図②　日本語の5母音の語頭・語中・語末形例

お	え	う	い	あ	
					語頭形
					語中形
					語末形

図③-1　日本語の名前の表記例　石田



図③-2　源義経